

学生相談の歩みと今後の展望

— 本学学生相談室の活動を振り返って —

上野 容子*, 山本 洋子**, 高橋 寛子**

(平成16年9月30日受理)

The History and Outlook for Student Counseling

— Reviewing the activities of the Student Counseling Room in Tokyo Kasei University —

UENO, Yoko YAMAMOTO, Yoko and TAKAHASHI, Hiroko

(Received on September 30, 2004)

キーワード：学生相談，学生生活支援，カウンセリング，連携，コーディネート

Key words：student counseling, campus life support, counseling, cooperation, coordination

はじめに

本学の学生相談活動は、昭和46年度に板橋校舎において「学生カウンセリング室」として活動を開始して以来、今年で実に32年の実績を重ねてきた。その活動の変遷は大学運営の歩みと共にあり、これまでに関わった多くのスタッフ、関係者の弛まぬ努力と日々の地道な活動に裏付けられている。本学で学ぶ一人ひとりの学生が、より充実した学生生活をおくることができるよう、個別相談を基本としながら、創意・工夫をし、時としては悩み、揺らぎ、様々な活動を生み出してきた。携わってきたスタッフの活動経過を、ぜひ一人でも多くの教職員を始め、関係者の皆様にお伝えする必要があると感じた。

今回、これまでの活動を振り返りながら、今後の本学における学生相談活動のあり方を展望してみたい。なお学生相談活動については各校舎の専任スタッフ、板橋校舎は山本洋子、狭山校舎は高橋寛子がまとめ、今後の展望を上野容子が論じた。

I. 板橋校舎における学生相談活動

1. 板橋校舎学生相談室の歩み

(1) 学生相談の始まり

日本での学生相談の歴史は、昭和26年にアメリカカ

ら派遣されたロイド博士 (Wesley, P. Lloyd) をはじめとする講師団を招いて行われた、「学生助育」(Student Personnel Services) をテーマとした学生補導厚生研究会に端を発している。

研究会では、大学は知識・専門技術を習得するだけでなく、学生の全人的な統合を回復する目的を含んだ教育の場であるという、大学教育の新たな概念の必要性が検討されている。学生相談が日本で最初に活用されたのは、昭和28年、東京大学の学生相談所だといわれ、昭和40年代には、保健管理センターの中に学生相談部門として広がっていき、平成11年に実施された文部省の調査では、全大学の92.3%に学生相談の機能を有する機関がある 1)とされている。

(2) 本学学生カウンセリング室の開設

本学の学生相談活動は、昭和46年度に学生カウンセリング室としてスタートした。

開設当初の様子について、当時の室長(増田實：以下スタッフの敬称略)は、報告書の中で「カウンセリングはその人の問題や障害の治療(Therapy)に目を向けることをするが、治療のみが目指されているのではない。むしろ治療も含めた、その人の人間的・内面的な成長(Growth)に目を向け、それを可能ならしめるよう援助しようとする働きかけなのである。この意味では、教育(Education)と共通の基盤をもって」2)という活動の趣旨を、学内に理解してもらうことに苦慮していた様子が伺える。大学に対する数々

* 心理教育学科 精神保健福祉研究室

** 保健センター 学生相談室

の要望書が過去の報告書に掲載されており、活動の展開＝相談場所と人員確保の歴史のようでもある。

相談活動は旧第五本館1階の学生部で始められ、翌年旧講堂（現在の120周年記念館）の広報室跡を改装し、1階を事務室、2階を面接室として使用した。開設3年目に室長の他専任職員（辻敬子）が採用となり、毎日開室することができるようになった。

開設10年目（昭和55年度）に、学生カウンセリング室は学長直属機関となり、新たにカウンセラーとして教員スタッフが増員された（室長：跡見一子、橋口英俊）。昭和57年専任職員の交代（平田かず枝）があり、スタッフの複数体制と共に活動も活発になり、研究活動として学生カウンセリング室報告書第1号も作られた。開設15年目（昭和61年度）には、新しく文学部が創設され、狭山校舎にも学生カウンセリング室が開設される運びとなり、専任職員（山本洋子）と共に、年を経ながら教員スタッフ（中村誠、金平文二、平澤尚孝、川合貞子）が増員されている。

学内スタッフだけでは相談時間も限られるため、昭和59年度から非常勤カウンセラーの採用が認められ、心理的な相談に加え身体的な悩みにも応える必要性から、女性の産婦人科医（佐藤和子、黒島敦子）が嘱託として採用された。相談件数の増加に伴い、週1日～3日勤務の嘱託カウンセラー（末武康弘、以後崎はるみ、木ノ瀬朋子）が、平成7年より事務・受付補助として年間1名の業務補助員（福田美和子、原田由喜枝、丹野京子）が採用され、年々学生への対応も充実していった。

(3) 保健センター学生相談室へ

開設から26年目（平成9年度）には、学生の心身の健康の保持増進をはかり、教育効果の向上を助ける目的で、保健室と学生カウンセリング室が組織統合され保健センターとなり、名称も学生相談室（室長：保健センター副所長平澤尚孝）に変更された。

学生相談室は、旧図書館跡に新設された大学9号館1階に移転し、業務内容の見直しから、附属中学高等学校生徒のカounseling業務が加わった。学生相談室の他保健センター所長室なども借用しながら相談を開始し、大学の保健センター内だけでは活動の範囲が限られるため、平成10年度より附属学校の相談業務を中心にを行うスタッフ（大井美智）を採用し、附属校舎の保健室や応接室等を利用して頂きながら活動を

継続してきた。平成12年度に附属校舎にカウンセリングルームが新設され、現在は附属の先生方とスタッフ（達口恵）で定期的なミーティングを持ちながら、より良い活動を目指して業務内容の検討を重ねている。

また平成11年度には、地域に開かれた臨床心理相談事業と大学院生の臨床心理実習を行う目的で、保健センターと同フロアーに臨床相談センターが開設され、学生相談室の面接室を2部署で共用し、スタッフ2名も兼務となった。センターの立ち上げは急務であったが、学生相談業務をやりくりしながら、臨床相談センターの相談活動をスタートさせることができた。

2. 学生相談室利用者数と相談内容の経緯

開設から現在までの相談活動の経緯は、大学の組織編成より四期に分けることができ、32年間の相談室利用者数の推移を図1に、相談内容の推移を図2に示した。

利用者数の内訳は、個別相談、自己理解テスト（EPPS性格検査）の結果返却、昼食会やカウンセリング勉強会、相談室の図書貸し出しなどで学生相談室を訪れた来室者の述べ人数である（図1の在籍学生数は、各年度当初の学園年報記事より算出した）。

相談内容の各年度の比較については、①健康（生理不順など身体に関する相談）、②性格（昭和63年度までは自己理解テストの返却を含む）、③精神衛生（学生生活不適応に含まれる主訴であっても、心療内科等の受診歴があるもの）、④心理不適応（医療機関の受診はないが不安感が強いなど心理的な不安定さが顕著なもの）⑤学生生活不適応（学業・進路・休退学・課外活動・学生生活・寮生活・対人関係・家庭などの相談）の5項目にまとめた。

(1) 第一期 創設期（昭和46年度～昭和54年度）

第一期は個別相談を中心とした来室者で、面接の延べ数は年間平均468回である。開室日は月曜から土曜日の週5.5日で2名の担当で相談を担当していた。第一期、第二期の相談内容は、「性格」が最も多く、学生の自己理解を深めることを援助する目的で、自己理解テストの結果について、希望者に30分程度の面接を行っていた。相談内容は、「進路」「修学」「対人関係」が多い。

(2) 第二期 独立期（昭和55年度～昭和63年度）

この時期の来室者の平均は823名で第一期の1.7倍（平均面接数は432回）で、面接以外の来室者が年間平

学生相談の歩みと今後の展望

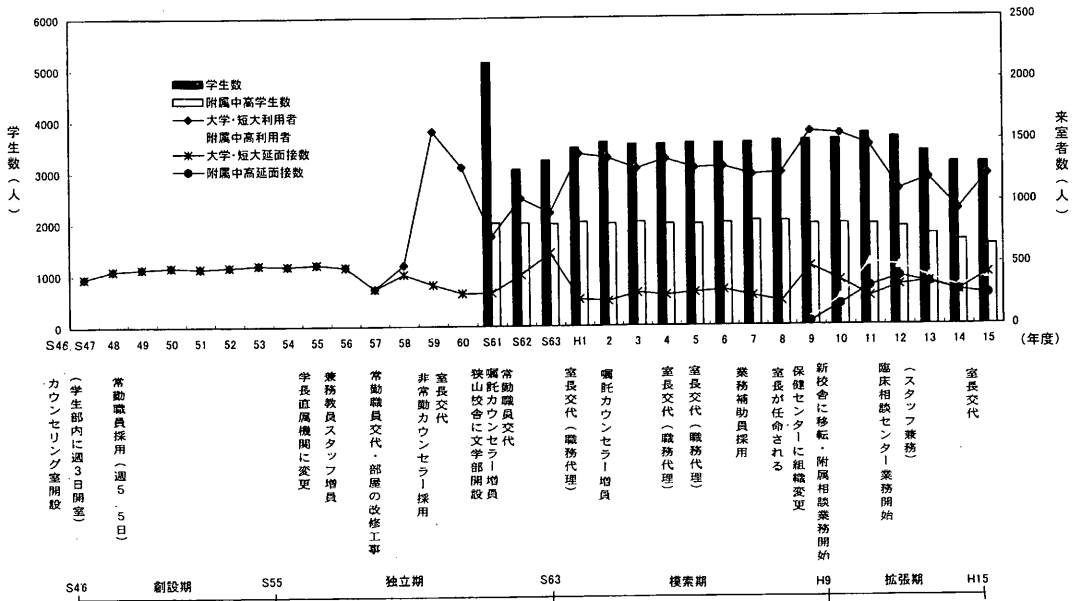


図1 板橋校舎学生相談室利用者数の推移(附属中高利用者含む)

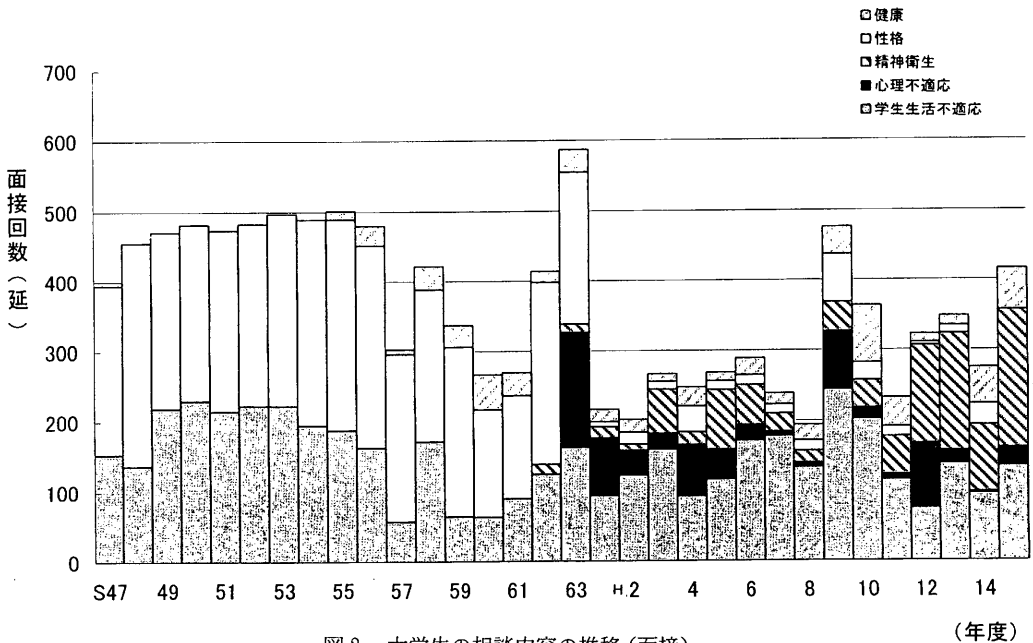


図2 大学生の相談内容の推移(面接)

均で396名と多くなっているのが特徴である。学長直属機関となった際、兼務教員スタッフが4名に増員され、相談面接以外の活動、“カウンセリング勉強会”“昼食座談会”などが開かれ、学年や学科を越えた交流の場に参加する学生が増えたことによる。昭和59～63年度の利用者増は、カウンセリング業務のための非常勤カウンセラーが週2日採用され、より多くの相談を担当できるようになった結果である。

相談内容としては、「進路」「対人関係」「性格」と、また当時の室長が女性の小児科医であり、身体面も含めた女性特有の相談に対応した結果新たに設けられた分類の「健康」も多い。

(3) 第三期 模索期(平成元年度～平成8年度)

利用者数は各年度ほぼ横ばいで、個別面接の平均は下がり240回、来室者の平均は約1.5倍増の1299名となった。これは、新入生全員に実施している自己理解テスト結果を、面接ではなく簡易な説明でより多くの学生に返却するようになったからである。

この時期、主なスタッフが狭山校舎の文学部所属教員であり、新設学部業務が多忙なため学生相談室業務に専念できない時期であった。室長職務代理の交代が3回あり、「健康管理センター検討委員会」で学内の学生相談室の位置付け等が検討され、相談室の基盤が組織上不安定であったとも言える。相談内容は「進路」「対人関係」などの大学生活不適應に関する相談も多いが、心理不適應、精神衛生に関する相談も増加し始めた。

(4) 第四期 拡張期(平成9年度～平成15年度)

保健センター学生相談室となり、来室者の平均は1287名、個別面接の平均は第三期に比べ約2倍の766回になった。学生相談室が新しい建物で明るい雰囲気になり、保健室に來ながら気軽に立ち寄れる場所となったことで、学生も利用しやすくなったと推測することができる。

附属の相談活動は、スタッフの増員で、来室者年間平均は182名、面接回数平均は235回となり、大学と合わせると、来室者平均1469名、個別面接約1000回になった。組織やスタッフ数、施設環境の変化と共に、利用者は開設当初の約2.5倍の増加となっている。臨床相談センターとの兼務、附属生徒への相談対応などの業務変化の中、平成12年度には、大学の学生相談業務だけに専念できるスタッフが、週4日の業務補助

員と嘱託2名となり、ミーティングやケースカンファレンスを頻繁に行うなど、スタッフ間の協体制作りや運営の工夫が求められた。限られたスタッフで相談室の活動を維持していくに当たり、増加する個別面接に対応するだけで精一杯の時期であった。

相談内容は「健康」「心理不適應」「精神衛生」が目立って多くなっている。進路や対人関係などの相談でありながらも、その背景に不眠や抑うつ、自傷行為・摂食障害や食生活・睡眠の乱れによる生理不順、などが含まれ、婦人科・精神科の嘱託医の相談日を設けたことにより、精神衛生に関連する相談への対応が可能となった結果である。また、保健室に身体的な処置や相談で訪れ、対人関係や進路、性格などの悩みを打ち明ける学生に相談室を、学生相談室を訪れた学生で頭痛や胃痛など身体的な訴えがある場合は保健室を紹介するなどの連携ケースも増えている。

(5) 相談活動の実際

不眠や強い抑うつ感などの「精神衛生」に関する相談であっても、語られる内容には、学業、進路、対人関係、家族などのエピソードが織り込まれている。

以下にクラス担任と家族、嘱託医と連携したA子のケースの概略を報告したい。プライバシー保護のため、事例の趣旨を損なわない程度に、一部内容を変更している。「J」はA子、<>はカウンセラー(以下Co)の発語である。A子の来室が不規則で、1名の対応では時間的に難しく、家族との対応もあり、2名のCoで対応した。

A子が学生相談室を訪れたのは、新学期もしばらく過ぎた5月の初めである。20歳の短大2年生で、両親と弟の4人家族の長女で、地方から出てきて一人暮らしをしている。

【主訴】友だちとうまくいかず悩んでいる。

【初回】A子は小柄で色白、声も小さく華奢な印象の学生である。「友だちにお茶を誘われたので一緒に行ったら、宗教の勧誘だった。すぐに断ったが何度も勧誘の電話が来て、怖くなって授業も行きにくい」という内容で、卒業が心配で相談に来たという。A子の不安な思いを受け止め、一人で焦っている様子が伺えたので、他の友達に頼んでなるべく一緒に授業に行くこと、ご家族に話して連休中は実家に帰って様子をみた方が良いと話し合い、A子も安心した様子で落ち着いて帰っていった。

【再来室】初回から4ヶ月後、後期の授業が始まってまもなくA子が再び訪れ、昨年度落とした再履修科目を休んでいて「単位が取れるか心配」と涙ながらに話し出した。「ひとり暮らしに慣れず、夏休みにアルバイト先の人間関係でも悩んで、大学も休みがちになった」など1年時の様子も語られ、「卒業はしたくて、2年生で気持ちを切り替えてみたけれど、授業に出られなくてどうしたらいいかわからない」と思いつめた表情であった。担任の先生にも相談し、気持ちはよくわかって頂いているのに、授業はどうしても休んでしまう。夜眠れず、朝のラッシュの電車は気分が悪くなり途中下車してしまう。気持ちが急にふさいで、人といても自分の世界に閉じこもってしまうことがあってアパートの外に出られない。気分の波があり不眠も続いている様子なので、嘱託の精神科医を紹介し、うつがひどいので、まず両親に連絡し、クリニックの投薬治療と並行して、「卒業したい」という希望を失わないように学生相談室の面接でフォローすることになった。A子は親には知られたくないということなので、Coは家族との連絡調整に入ることにした。

【家族との連絡】A子によると両親は弟とは仲が良いが、A子とはあまり話をしない。A子は大学進学も賛成してもらえず、学費とアパート代以外の生活費はアルバイトで補っていた。小さい頃からおばあちゃん子で、母親と祖母は不仲、父親は小さい頃は勉強や躾のことで厳しかったが、今は仕事も忙しく、高校の頃から話をしなくなった。両親への連絡については「わかってもらえないし、怒られると思う」と頑なな様子だった。Coよりくご両親には相談室から説明もできるし、卒業のためには一緒に考えてもらう必要があるのでご実家に連絡してみましょう」と伝えた。数日後、A子の母親が来室し、「メールの返事の様子が心配で上京してきたら、本人は何も話さず、『相談室に聞けばわかる』と言われた」と困惑されていた。経過を話した上で、A子は卒業を希望していること、気分の波があると思うように頑張れなくて悩んでいることなどCoより説明した。母親も、「何を考えているのか全くわからないんです」と、話し合う手段がなく困っている様子だった。Coはお互いの誤解を紐解くような、親子の会話の橋渡し役を行いながら、卒業に向けてサポートする方向になった。A子は本来やりたいと思っていることができないので、自分を責めてしまいがちな

め、くともかく今は卒業が目標。今の状態でできる課題からやって、先生にアドバイスをもらうことにしましょう」と伝えた。

【卒業に向けて】クラス担任の先生より学生相談室に、卒業までの出席と課題について話したいが、A子と連絡が取れなくて困っているという連絡があった。その頃ご両親も学生相談室に来室され、卒業について教務課から連絡があり、「卒業の環境を整えて、ゆっくり今後について話し合いたい」と卒業延期の手続きを取られたとのことだった。A子はクリニックにも通い出し「何となく自分を取り戻しているような感じ」ができてきた。相談室でも卒業後の対応を検討する必要がある、嘱託医、A子、ご両親、Coで卒業に向けての対策を再度話し合った。「わかってもらえるはずがない」というA子に、＜事情を話すだけでもご両親は安心されるかもしれないし、顔を合わせて安心してもらおうのが一番いいかもしれない＞と話した。話し合いでは、「やりたいことをさせて欲しい」というA子と、「そういう気持ちでいるのが初めてわかって良かった。でも実際の生活費など家族が援助するには限界がある」など、家族のお互いの気持ちと今後の生活についての確認がなされた。その後A子は無事に卒業し、家族の仕送りも受けながらアルバイトと専門学校に通った。

3. 板橋校舎学生相談室の今後に向けて

学生相談室のスタッフは、心身面の健康に目を配りながらも、その症状のみにとらわれることなく、学生が自らの力で今できることを共に探しながら、今後への希望を見失うことがないように考えていく必要がある。そのため、学生生活や日常生活でやらなければならないことと本人がやりたいことのバランスが取れるように、本人の自主性・社会性を育てるよう見守る姿勢と共に、学生本人とその周りの人との関わりを生かしていく視点、その関係をつないでいく役割が求められる。

本学で相談活動がここまで続けられた背景には、学生・生徒の教育の充実を図ろうという学園の方針と学園教職員の協力があり、その意向に沿いながら活動に関わってきた全てのスタッフの「相談活動を通じて人間の成長を信じて見つけよう、共に考えていこう」という思いが脈々と受け継がれてきたという歴史がある。そしてそれは、悩みながらも真剣に生きていこうとする学生・生徒の姿に支えられてきたことでもあるといえよう。

これまでの学生相談室の活動内容は、学園の要請を受けながら、様々な形で相談活動の種を蒔いてきた感があり、今ここで、開設当初の活動も参考にしながら原点に戻って、学生が自律した生活を送ることができるよう援助する“学生のための”相談活動を見直していく時期に来ていると考えられる。相談以外の援助活動も含めた学生へのサービス内容の検討、学内のネットワーク作りのシステム化、予防活動としてのメンタルヘルスに関する情報提供など、学生相談室がこれから担うべき役割と課題等について、現在、市丸雄平保健センター所長、学生相談室長の上野容子副所長と共に、両校舎スタッフによる日々の相談活動の検討が続いている。

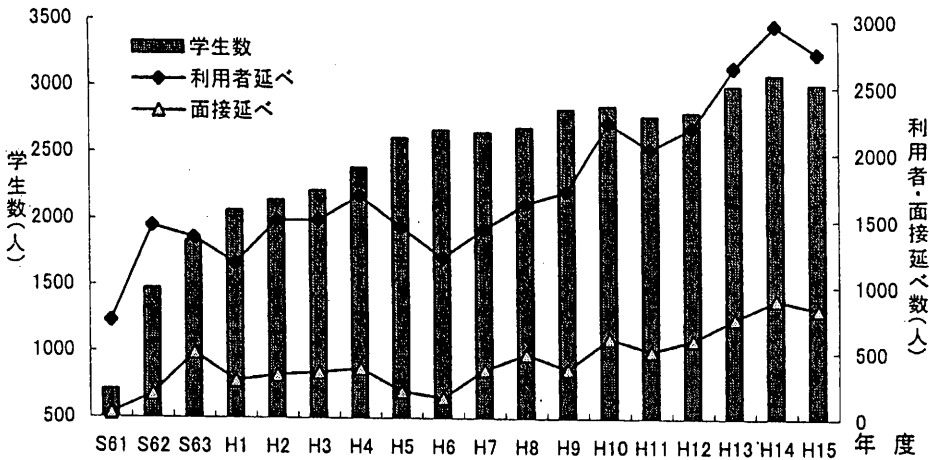
(山本洋子)

II 狭山校舎における学生相談活動

1. 狭山校舎学生相談室の歩み

(1) 狭山校舎の開学とその特徴

昭和61年度に文学部が設置され、狭山校舎が開学した。豊かな自然環境の中で、現在文学部1～4年生、家政学部1・2年生、文学研究科の大学院生合わせて3000名を超える学生が学んでいる。板橋校舎が“歴史と伝統”に特徴づけられるならば、狭山校舎は“のびのびとしたおおらかさ”が特徴ともいえよう。約6割を家政学部の学生が占めているが、全体の8割が1・2年生であることから入学期での不適応や以前から持ち越された心理的課題を抱える学生も多い。文学部の学生には一貫した援助が可能だが、家政学部の学生は2年間で板橋校舎へと移るため、“新しい環境へ送り出す”という課題が加わる。このような特徴から狭山校舎での学生相談は、板橋校舎の活動を基盤としながらも、視点を異にした新しい活動が求められた。ここでは組織を事例研究する(高石, 2003)との視点に立ち、学生相談室の歩みを概観した上で、相談内容の変化と対応の専門性について述べてみたい。



- | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|------------------------------------|--------------------------|---------------------------|--------------------|--------------------------------|--|-------------------------------------|---|----------------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|--|
| <p>専任インテーカー増員
創設準備</p> | <p>専任インテーカー新規採用
嘱託カウンセラー採用</p> | <p>報告書第4号発行
全年揃う</p> | <p>報告書第5号発行
報告書揃う</p> | <p>嘱託カウンセラー勤務減</p> | <p>業務補助員採用
保健センターに組織替え</p> | <p>グループワーク開始
昼食会定期開催
集団面接室整備常時開放</p> | <p>学生アドバイザに任命
専任カウンセラーへ職名変更</p> | <p>学生相談室報告書第1号発行
臨床相談センター開設(板橋)</p> | <p>狭山校舎との講演会開催
学務課との相談開始</p> | <p>嘱託科長会開催
嘱託科医相談開始</p> | <p>嘱託科カウンセラー増員
ミーティング定期開催</p> | <p>学生相談室報告書第2号発行
学生相談室報告書第2号発行</p> |
|----------------------------|------------------------------------|--------------------------|---------------------------|--------------------|--------------------------------|--|-------------------------------------|---|----------------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|--|



図3 狭山校舎学生相談室利用の推移

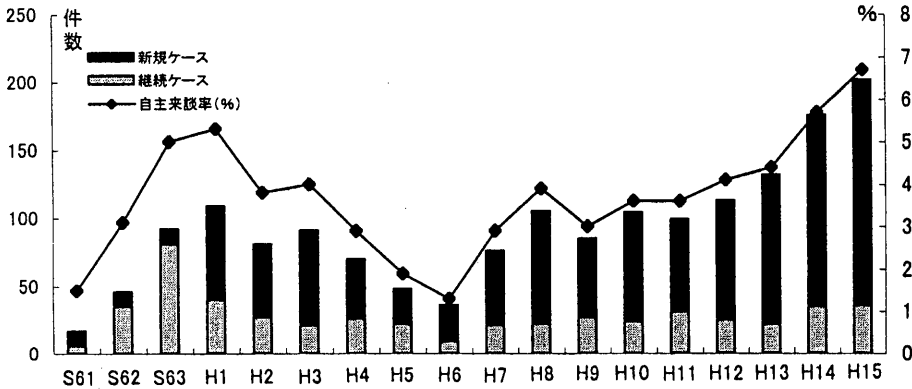


図4 年間ケース数と自主来談率の変化

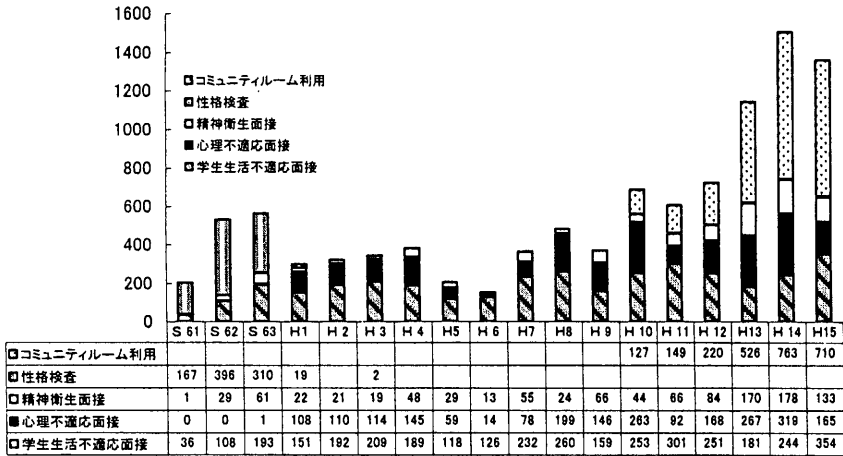


図5 面接・利用内容の変化

(2) 第一期 導入期(昭和61年度～平成6年度)

板橋校舎における長い学生相談の歴史が基盤となって、学長直属機関の分室という位置づけのもと、独立した建物(旧米軍の通信施設)が用意され、保健室と区切って使用することとなった。これは事務室・受付、面接室2室、集団面接室1室、倉庫からなっており、19年目を迎えた現在も手狭ながら同スペースでの活動を行っている。グループワークができるようにとの配慮から板橋校舎にはなかった絨毯敷きの集団面接室1室が整えられたのが大きな特徴であった。当時は“居場所”や“フリースペース”といった発想が充分認知されていない時代であったが、ここに将来的な学生相談への方向性が見取れ、増田實元室長の先見の明が伺える。専任インターカー(受理面接者)として職

員が増員され、兼務カウンセラー2名(増田實、橋口英俊)とインターカー(平田かず枝)とで相談活動がスタートした。現在も兼務や非常勤のみで活動を行っている大学が多い中、専任が各校舎に1名ずつ確保できたことは、今日まで安定した学生相談活動が行われてきた大きな要因と考えられる。初年度の在籍学生は1年生のみで約700名であった。集団面接室を開放していたことから、昼食時や授業の空き時間には、居場所として多くの学生が利用していた。翌年度学生数は倍増し校舎は賑わいをみせ、前任者の退職後インターカーとして神保(高橋)寛子が、嘱託カウンセラーとして末武康弘が新規採用された。また兼務カウンセラーとして中村誠、平澤尚孝、後に嘱託カウンセラーに木ノ瀬朋子も加わりスタッフは増加した。学生の臨時定

員増もあって利用者は年々増え続け、室長交替や専任職員の育児休業などの変化はあったが、新入生の性格検査実施、報告書の発刊、宿泊ケースカンファレンス、学生との座談会開催、カウンセリングカード分析や学会発表など充実した導入期であったといえる。

(3) 第二期 成長・発展期(平成7年度～平成14年度)

在籍学生数は3000名近くとなり、心理的困難を抱えた若者が増加するなどの社会背景から俄かに相談件数が増加した時期である。兼務カウンセラーとして平戸ルリ子が、また阿住一雄、近喰ふじ子が兼務医師として加わったが、スタッフは困難な事例へのかかわりに翻弄されることも多く、集団面接室利用学生への十分な対応が困難となった。パーソナリティ障害など難しいタイプの学生には日々細心の注意が必要とされるため、一時期集団面接室の開放を見合わせるという事態も生じた。専任職員は面接のために席をはずすことも多く、平成8年度から業務補助員(河北真知子)が週3日(後に週4日)勤務している。以来受付業務は、学生の日々の様子を見守る役割として、重要性を増してきている。

平成10年度には復学学生の居場所作りのために集団面接室の全面的な整備が行われ、コミュニティルームとして常時開放が再開された。学生の日常的な居場所確保とグループワーク定期開催とが実現されるに至って、サポートの幅はさらに広がっていった。これに先立ち平成9年度には保健センター学生相談室へと組織変更されたが、狭山校舎では施設自体の変更がなかったため学生や教職員の利用にそれほどの変化は見られなかった。平成12年度には、専任職員がかねてより臨床心理士の有資格者であったことからカウンセラーへ職名変更となり、面接にも責任をもって対応することとなった。学生アドバイザーとして平戸ルリ子、上野容子が任職され、越智啓太兼務カウンセラーとともに学科との連携体制も整えられた。平成13年度からはグループワーク参加者が中心となって学生が狭山祭(学園祭)に参加、現在も毎年継続している。これら一連の活動はささやかなものではあったが、学生相談室スタッフが大学コミュニティの一員としての自覚をもち、教職員と共に学生援助を行う態勢づくりへと向かうなどの意義も大きく、個別面接に留まらない「開かれた学生相談活動」への土台づくりの時期であったといえよう。

(4) 第三期 充実期(平成15年度以降)

徐々に増加していた相談件数が、平成15年度にはピークに達した。これは在籍学生数のピークとも一致するが、学生が気軽に利用し始めたこと、囑託の婦人科医(黒島淳子)、精神科医(中村誠)が相談を開始したことも要因として挙げられる。学生アドバイザーに木村博人が、囑託カウンセラーに内田夕紀子、向(三浦)泉、田内奈々子加わり、スタッフミーティング定期開催、昼休みの学生アドバイザーミーティング、週一回のケースカンファレンスなど、上野容子副所長を中心として、手薄であった相互の情報共有・研鑽の機能も充実し始めた。さらに狭山科長会との連携、学生生活支援での学務・教務課との情報交換会、講演会開催など、多面的な協働活動が展開されつつある。ここ数年間教職員へのコンサルテーション(助言)の件数が増加しているが、今後はクラス担任との連携や学内教職員のバックアップ体制作り、予防的視点からの援助などさらなる充実が求められるであろう。

2. 相談内容の変化と対応における専門性

年間ケース数と自主来談率の変化を、図4に示した。導入期に性格検査を用いた面接を行っていたことから、相談件数・来談率とも高い時期が見られる。専任が育児休業中であった平成5・6年度には一時減少したものの、平成7年度を境に増加の一途をたどり、平成15年度には年間来室者2747名、面接数825回、ケース数202、来談率6.7%となった。学生相談における来談率の目安は3%台といわれているが、図4からも①来談への敷居が低くなってきたこと、②効率よく新規来談学生を受け入れている様子が見て取れる。

図5では利用者の内訳・内容の変化を示した。ここでは学業・対人関係・性格・進路・家庭・休退学などの相談を“学生生活不適応”として括り、“心理不適応”、“精神衛生”の3分類と性格検査、コミュニティルーム利用を合わせて変化を追っている。年度にもよるが、相談内容の中心が、学生生活上の不適応に関する相談であることがわかる。藤原(1998)は「これからの学生相談は修学問題を接点にした相談システムとして再構築する必要がある³⁾」と述べているが、修学問題はすべての学生にとっての共通課題であり、今後も対応には工夫が求められるであろう。一方で“心理不適応”“精神衛生”に関する面接もまた増加している。心身

の不調を訴える裏側には「勉強に集中できない」「教室に入れない」「試験や実習が不安」といった、修学上の困難性が絡んでいることが多い。その際本人の自覚と程度に応じて援助の方針を見立て、ガイダンス(助言)・カウンセリング・心理療法・医療機関紹介や保護者・教職員との連携などさまざまなレベルの方策やスキルを用いて援助していくことになるが、このあたりが学内他部署のサポートとは異なる点であろう。援助に要する期間は一回限りも数多くあるし、4年間を超える長いかわりもある。心身両面から深いテーマに寄りそっていく場合、その歩みをともにするためには莫大なエネルギーが必要とされることもあるが、これも学生相談のひとつの専門性であり、心理臨床の一現場とされる所以ともいえよう。

(5) 狭山学生相談室での相談活動の実際

次に事例を取り上げ、実際の面接の経過と学生相談のかかわりの一端を示してみたい。

【対人関係に障害をもつB子の事例】1年の夏休みが終わる頃B子は学生相談室を訪れた。「幼稚園の頃から人付き合いができない。緊張が高く気持ちが窮屈だった」と語り「入学後グループの対人関係に必死で合わせてきたがもう限界なので大学をやめたい」というのが来談動機であった。その後B子とは、休学期間をはさんで復学、卒業までの間、面接・グループワーク・手紙などを通して約5年に及ぶかわりが続く。B子は当初疎通性に乏しく、自分の世界の中で一方的に語り続け、筆者はB子と触れ合っているという実感がもてないため言語的関わりには限界が感じられるほどであった。登校するが教室には入らず、図書館などで過ごす日が増えていく一方で、「親に従ってきたが、家族の考え方にも問題があることに気づいた」「自分の気持ちを隠し押さえてきたが、面接では本当の気持ちに向き合いたい。授業には出ていないがもっと大切なことをしている」と語り始め、徐々に当初の退学から休学へと心境が変化、驚き反対する両親を根気強く説得し、クラス担任とも相談の上休学手続きをとった。

休学中は初めてのアルバイト体験を通して「雑談ができなくてもこれが自分の性格」と割り切れるようになった。小学生の頃のいじめられた体験での傷つきも語られたが、「休学して自分の中を整理しコントロールできるようになった」と翌年度復学。同時期に復学する学生を含めて、筆者からコミュニティルームでの

グループワーク(昼食会)を提案しB子も継続的に参加した。そこには一般の学生に加えて、摂食障害や身体に障害をもつ学生、引きこもりの学生など様々な参加者がいた。B子は徐々に他の参加学生ともかわり始め、相談室外での昼食や外出にも参加、新しい体験を積む一方で「本当は人と関わることは好きじゃない」と必要な時以外はひとりで行動することも選択した。筆者は現実での生活体験を支えつつ、面接では時に描画や箱庭など非言語的にかかわりも導入しながらB子の世界を共有した。

3年生でB子は就職について考え始めるが、社会的な適応や技能に乏しく立ち往生することも多いため、B子の要望で買い物、質問のしかた、お礼や断る時などについて筆者と現実的なロールプレイングを行ったりもした。A子はアルバイトで好きに使えるお金を手に入れ、生活の中での楽しみや趣味も見つけ始めた。4年生になると「ひとりでやっていけるか試してみたい」と定期的な面接を中断。学内行事や研究室での先生方との交流を通して体験を積んでいた。

筆者は昼食会でB子と親しくなったD子や昼食会の案内状を介してB子と間接的につながりを保つよう心がけ、卒論指導での行き違いから一時パニックに陥った際も、指導教授の先生と連携をはかりながら見守った。卒論を無事提出した卒業間近のある日、B子は1年半ぶりに相談室を訪れ、「自分の力でやりたいことがやれた」「休学で回り道をして価値観が変わった」「まあいいやと考えられるようになった」と振り返り「ここ(相談室)とは離れていてもずっとつながっていたよう」としめくくった。これらから学生相談は、様々な人や物とのかわりの場を提供する役割を持ち、そこで培った生活体験や対人関係を基盤として社会へとつなげていく可能性があることなどが示されている。

B子にとって現実社会はさらに困難さに満ち溢れているであろう。しかし大学という大きな枠組みの中で確実に何かを育てはぐくみ、自分自身に対するささやかな自信を得て、社会へと巣立っていったものと考えられた。

3. 狭山校舎学生相談室の今後に向けて

狭山学生相談室の現在の大きな特徴は、コミュニティルーム利用学生の増加と多様化であろう。実際に間近でそのひとりひとりのありようを見ていると、「育ち

“巣立つ”というイメージに近い。友達ができないのか空き時間にいつも顔も上げずマンガ片手にパンをかじっている学生。受付を通る際スタッフと視線が合わないよう前髪で顔をかくし、こちらの声かけにも反応しない学生。精神科で投薬を受け眠気や吐き気などの副作用と闘いながら教室まで這うように出て行き、授業が終わると「ただいま」と戻る学生。それらの学生がふとした瞬間に顔をあげ視線を合わせて「こんにちは」と反応するとき、「何とか1時間今日は教室で座ってられた」と報告するとき、学年も学科も違う内気な学生同士が雑記帳を介してごひいきのバンドの話題を共有しあう姿などからコミュニケーションルームが各人なりの対人関係を体験している場となっていることが伺える。こうしたひとりひとりのゆっくりとした変化にひとりの大人として寄り添う時、学生相談の日常性・開放性が大きな利点となって、大学も“育ち”に関わる教育現場なのだ実感させられる。ここ数年入り口前の小さな花壇に、学生とスタッフとが球根や種をまくところから花を育てている。対人緊張の強い学生、摂食障害を抱えた学生などが無心に土を掘り返し、水やりをしている。今後このような活動が学生相談室ならではの意味付けをもって継続されていくことが必要であろう。その際学生にとって今何が必要であるのかを常に敏感に感じとり、実践へと結びつけていくことが学生相談の現場としての使命であると考えている。

(高橋寛子)

Ⅲ. 本学における学生相談活動に関する今後の展望

1. 学生アドバイザーの関わりをとおして相談活動のあり方を考える

(1) 学生アドバイザーの役割

平成14年度の1年間、学生アドバイザーとしての関わりをもち、その役割は、担当教員との連携が必要な場合の調整役や、専任カウンセラー(職員)のスーパーバイザー役、センター活動構成員の一人等である事が理解できた。この職務が平成11年度に設置された背景として、この時期、板橋校舎では臨床相談センターの創設で相談室の専任職員山本が兼務体制を取らざるを得なくなっていたことや、狭山校舎では、平成6年度から相談件数が増してきており(図-3)、これまでの教員の関わり(カウンセラーと教員の兼務でおこなっていた個別面接)では充分な対応が困難になると共に、教員とカウンセラーの多重役割に対して、学

生側からも「相談しにくい」との声があり、教員側からも、学生が相談したい時に即対応できる体制の充実、より多くの学生に対応できるような活動の必要性から、教員の個別面接業務の見直しが検討されてきた。学生アドバイザーは、より多くの学生の相談に応じ、多様な相談室活動のあり方を検討していく必要が生じてきた過程の中から生まれてきた職務であることを改めて認識できた。

(2) 学生相談をとおして見えてきた学生生活

学生アドバイザーとして、狭山校舎で、月に1度の学生相談に関するミーティングに参加させていただくようになった。当時、保健センター副所長(平澤尚孝)が相談室運営の責任を負っていた。なかなか全員が集まる時間が確保できず、関係者出席の調整役を担っていた専任職員高橋の苦労がうかがえる。結局、昼食時間を使ったミーティングとなった。私にとっては、初めて大学生の学生相談の実情を見聞きする場であった。父親がリストラに遭い、学業継続や、両親の緊張した関係に強い不安感があり体調を崩してしまっている人、摂食障害や不安発作、リストカット、過呼吸等の精神科的な症状を抱えている人、卒業単位取得に関する相談で担当教員との調整が必要な人、自分自身の個性や人間関係で悩んでいる人など、実に様々な問題や悩みを抱えて来室していることを確認した。

(3) 精神保健福祉士としてのこれまでの活動と課題

私は、精神科病院に5年間精神科ソーシャルワーカーとして勤務し、その後、同職種(平成9年度より、国家資格取得者は精神保健福祉士と名称変更された。私は平成9年度に取得)で地域の精神保健福祉施設や保健所において、精神科で治療を受けながら生活している人達の社会的リハビリテーションや地域生活を支援する活動を25年程続けてきた。主な業務は受診、入院生活、退院援助等の個別相談援助、具体的な生活支援(訪問、受診同行、福祉関係の法的手続援助、ホームヘルパー等の居宅生活支援サービス提供のコーディネート等)、就業支援、精神保健福祉啓発活動を基本とした地域活動、関係機関のマネージメント等である。本人自身の問題を解決していくための援助を基本としながら、本人と本人を取り巻く生活環境との関係性を重視し、具体的にその調整や改善にも取り組んできた。つまり、既に精神的な病気や障害を有し、精神科の医療機関で治療を受け、社会生活に困難を来している

人達を対象とした分野で上記の業務に従事してきたことになる。

学生相談に関わるようになり、私のこれまでの業務は、メンタルヘルスやその予防の分野に関わる機会が大変少なかったことに気づかされた。それから、精神保健福祉士として幼少期から高齢期まで、人のライフサイクルの過程でメンタルヘルスや、社会的・地域的リハビリテーションや支援を総合的に捉え、それを必要としている人達に必要な援助や支援をしていくことの課題は、まだまだ山積していることも認識した。

(4) 学生相談室の今後の課題…連携と心理職以外の参加

そのような視点で大学の学生相談活動を考えると以下の課題が見えてきた。

今後の相談室の役割とも関係するが、来室する学生の相談内容は実に多種多様で、本人の人格の発達の問題だけでなく、家族や家族を取り巻く環境の問題、学生生活そのもの問題も多く、それに起因して心の健康を害している場合がある。それらを切り離して本人の自己成長に重点を置いた個別面接援助だけでは問題は解決しないし、的確な援助とは言えない。生活状況をアセスメントし、本人が抱えている問題や、それらの問題を抱えながらも生活していく上で生きていく強さがどこにあるのかを把握した上での援助計画を立て、必要があれば関係機関（医療等）や関係者（本人を支えている人）との連携を構築していくことも援助の方法としてとても重要である。そのためには心理職の同職種だけの関わりでは限界があると感じている。社会教育関係者や社会福祉士・精神保健福祉士等のソーシャルワーカー等の関わりも検討されるべきで、関係職種の拡大を図る必要があると考える。附属中学・高校には、スクールソーシャルワーカーが新たに配置され、大学側から派遣しているカウンセラーとの連携をはかりながら活動を開始している。導入期なので、お互いに試行錯誤している時もあるが、確かに活動を共有し始めている。スクールソーシャルワーカーの導入は、今後の相談活動のあるべき方向性を示唆していると信じている。

2. 保健センター副所長としての関わりを通して保健センターと学生相談室の方向性を考える

(1) これまでの相談活動の軌跡

この度の紀要投稿は、これまでの学生相談活動の軌跡を振り返り、学生相談室の今後の方向性を展望していく上で、前方に光明を見出していく契機にしたいと考えたからである。相談室に関わった関係者の皆様の活動を時間軸で振り返ってみようと、「学生カウンセリング室報告書1～5号（昭和46年度～平成元年度）」と「保健センター 学生相談室報告書1,2号（平成9年度～平成14年度）」を拝見させていただいた。それは、開始期の創意・工夫とご苦勞の数々、そして継続と内容の充実に向けての弛まぬ努力の足跡が、文字や数字となって私の目を釘付けにし、ひしひしと胸を打ってきた。改めて先達の方々に心から敬意を表したい。

相談室に対する学生のニーズを相談件数で見ると、開設当初の46年度から54年度までの7年間は相談者の延べ数も500名弱であったのが、学生数の増加とともに増え続け、昭和61年度の文学部開設年度は板橋校舎と合わせて約1400名と約2.6倍となった。以後、板橋校舎では増減しながらの横ばい状態で、狭山校舎では増大している。相談件数の減は、山本、高橋の論文に記されているが、学生のニーズが減ったのではなく、従事する教職員側の問題で、専従できない状況やマンパワー不足で、相談室の活動を縮小せざるを得なかったからである。

(2) ミーティングを通じた連携

学生アドバイザーとしての関わりを経て、平成15年度から平澤先生からバトンを受け取り、副所長として主に相談室の運営や全体的な活動に責任をもつ立場で関わるようになり、学生のニーズはますます増大傾向で、しかも問題やニーズは多様化と心身の健康面でも深刻化していることがうかがえた。このような状況下で、両相談室の職員は、日々の相談対応を始めた業務に追われ、お互いの交流も希薄になっており、定期的なミーティングももたれていないような状況になっていた。私の役目は、まず、両相談室、両保健室、附属校との繋ぎ役であろうと考え、所長・副所長ミーティング、両相談室・保健室教職員全員の月1回の定例ミーティング、各相談室毎のカンファレンスを含んだミーティングを提案し、開始した。ミーティングを通じて、お互い顔を合わせ、活動の苦勞や手応えを共有し、実感し合うことを蓄積していきたいと考えている。連携や発展性のある議論はそこからスタートである。

(3) 今後の相談活動のあり方

保健センターの市丸先生が「保健センター学生相談室報告書(第2号)」に「新しい学生相談室のありかたを求めて」のテーマで提案しているが、今後は、個別相談優先で解決していくのではなく、一人ひとりの学生生活をしっかりと見つめ、学生自らが、学生生活の中から様々な体験を重ねていくことができるようなチャンスを具体的に提供していき、それをとおして自分自身の尊厳を大切に感じる心を養うことにつながるような援助が必要なのではないかと強く感じている。そのためは、治療的視点や、教育的視点よりも「学生生活を支援していく」という学生を支える視点が重要であると考え、その点からすると保健センターの一部として同組織のなかにあるのが望ましいのだろうかと私自身は感じている。保健室との連携は必須であるが、本学の一人ひとりの学生生活を支援する役割を重視するならば、むしろ「学生サービス機関」のひとつとして位置付け、進路支援センターや学務、教務課と近い場所にあり、学生にとってより身近に利用できるように工夫が必要である。そして関係する教職員は、各々一生懸命のあまり抱え込まず、役割を分担したり、共同での関わりを確認して、連携を密にしていこうと求められているように思う。

私見であるが、保健センターは、地域に身近なものとなるように医療機能も付置した健康管理センターとして地域に開いていくような方向性を検討できないものだろうか。そのためは、学生の健康管理の役割も兼ねるので、かなりおおがかりな構想と経済的なコスト試算が必要となる。現実的には困難な事業なのかもしれないが、今後の大学運営を展望すると検討課題のひとつと言えるのではないだろうか。

(上野容子)

おわりに

今回、このまとめの作業を通じて、我々は、今後の学生相談室の活動のあり方を展望する良い機会となった。これまで学生相談活動にかかわってきた全てのスタッフに敬意を表すると共に、培われてきた活動がさらに充実したものとなるよう、相談・研究活動を重ねていきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：大学における学生生活の充実方策について(報告)－学生の立場に立った大学づくりを目指して－, 2002 p.4
- 2) 東京家政大学学生カウンセリング室報告書第1号, p.4 (1981)
- 3) 藤原勝紀：学生相談の大学における位置と役割, 河合隼雄, 藤原勝紀編：学生相談と心理臨床, 金子書房, 1998 p.14
- 4) 文部省大学学術局学生課編：学生助育総論, 1953
- 5) 斉藤憲司：学生相談の専門性を定置する視点, 学生相談研究, 20-1, 1, 1999
- 6) 高石恭子：シンポジウム 学生相談機関の展開について 学生相談の特徴を伝えるための事例研究, 名古屋大学学生相談総合センター紀要(鶴田和美編), 2003
- 7) 前掲3)：林昭仁：学生相談に関する歴史と今後の課題
- 8) リーサ・カプラン他著 小松源助監訳：ソーシャルワーク実践における家族エンパワーメント, 中央法規, 2001
- 9) 山本和郎：危機介入とコンサルテーション, ミネルヴァ書房, 2000
- 10) 高橋寛子：学生相談における"つなぐ場"としての役割, 学生相談研究, 23(3), 2003

Summary

Since the Student Counseling Room established in 1971 at Itabashi Campus, the activities of student counseling in this university have achieved satisfactory results for 32 years. The activities are composed of consistent works and efforts by the staff of the room and other related staff. Being related to the organization management of the university, their works have sustained that the Student Counseling Room effectively functions to make each student's campus life more fulfill.

This review suggests that the staff have involved in individual counseling as a basic activity of this room and have created various activities through the attempt to provide more effective services for the students as well. This process sometimes has brought them difficulties and they have struggled to pursue sufficient counseling activities in this university.

It is a significant work to share the progress to construct the activities and services of the Student Counseling Room among more related staff of the university. This paper provides good opportunities to investigate more meaningful activities of student counseling in the settings of universities.